

宮沢賢治「土神と狐」の授業を作る

——理想と現実の不一致を中心に——

篠原武志

1 はじめに

宮沢賢治作「土神と狐」は二〇一四年度から教育出版『新編現代文B 言葉の世界へ』に採用された新しい教材である。この作品が異色といえるのは、宮沢賢治の作品にはめずらしく恋愛での嫉妬とそこからおこる殺人がモチーフになっているからだといつてよい。恐らくはそのために、今まで教材としても看過されてきたであろう。童話であるにも関わらず、中学校で扱いやすい教材とは言いにくい。

しかし、二〇一四年度、六年ぶりの中一担任をすることになった。そこで生徒を見ていて気づいたのは、以前より多くの生徒が第二志望以下として本校に入ってきていることである。彼等の一部には第一志望を受けた自分が忘れられないで、本校で学ぶ自分を受け入れ

られないという生徒がいる。そうした状況の中で、この教材に起爆剤として、生徒に訴えかけることができる要素が、生徒に自分の見えていた世界が一部でしかないということを考えさせる力があるのではないかと考えはじめた。私は、この教材を中一（中高一貫校、男子校、四五人×五クラス×週三時間）の生徒が自身の成長を促していくきっかけになるのではないかと考えて、授業で取り上げてみることにしたのである。

2 先行研究について

この作品の先行研究で白眉ともいえる存在は、近代と前近代という図式によってこの作品を読もうとする小森陽一氏の論である。小森氏は土神を陰陽道の五行説による土公神であるとする。そして、「陰陽道など俗信にすぎないと、捨てて顧みなくなった人間の社会、

明治以後の『文明開化』『富国強兵』『脱亜入欧』といった近代化を受け入れた日本人のあり方が、土神と狐の間における悲劇の原因だったことがここではっきりしてきます^①としている。この小森氏の近代・前近代という記号論的解釈は大変わかりやすい面を持っているが、例えば次のような箇所はどうであろうか。

周知のとおり、狐は稲荷信仰の中では五穀豊穡の神の使いとして、神の世界と人の世界とをつなぐ存在でした。もちろん、五穀の神は、古代日本における在来の神であつたわけですから、中国からの陰陽道の中で渡来した「土神」とは、異教の神と関わりを持つ者ということになります。「土神」と「狐」の根深い対立は、実是在来と外来の宗教をめぐる対立であつたといえるでしょう^②。

しかし、この作品内部から狐を稲荷信仰における狐とすることはできないと思われるし、「土神」との対立を在来神と外来神の対立とするのはあまりに牽強付会だということになるであろう。

一方、土神にとって「異質な文化をおわせる狐の外部性は脅威となつたのである」として、牛山氏は次のように述べる。

狐には、土神にとって未知なる領分は何もなかった。そのことを土神が知ったとき、狐はようやく、土神の領分に入ってきたのである。土神は自分が狐殺しを犯したことに気づく。神であ

宮沢賢治「土神と狐」の授業を作る

る自分が、ただの狐を殺してしまったのである。おのれの業を明確に意識した土神は、号泣するばかりである。狐が、土神の神としてのアイデンティティーを危うくしたのではなかった。土神は、自らの業によって神として生きられなくなったのだ^③。

この牛山氏の論は、未知の領分を自分の思い込みで作ってしまう土神を描いていて興味深い。教材として、生徒がどのような点に到達すべきなのかということが問題にされていないという点でやや物足りない。

田中実氏は樺の木・土神・狐の三者の人物像や語りを次のように捉える。

樺の木は主体的、能動的に相手と関わり、選択し、愛することを最初から封じられているだけでなく、そうした自身の姿を読み取る力を持たされていなかったのです。(中略)土神の心の支えは彼女を愛し慕う想いではなく、奪うことではなかったことに最後まで気づけなかったのです。逆に相手を脅かす自分に露ほども気がつくことがなかったのです。(中略)狐は自分の愛がどこか偽物、虚妄でしかないと自ら意味づけていたところに哀れがいつそう募り、「うすら笑い」の死に様は、狐が自分の運命を自ら受け入れる哀しさを感じます。(中略)もし土神に「りつぱ」でなく卑小な狐が見えていたら、逆にもし狐に

恐ろしい土神の矛盾に懊悩する姿が見えていたら、いやせめて土神の感じる自然の「ふしぎ」を感じることができたら、また樺の木が相手に依存的でなく、自らを恃むことができたら、この「物語」の結末の悲惨さ、後の祭りの哀しさを感じることはなかったでしょう。この作品はこうしたすれ違いによる劇を読者に、感動的に語っていると思います^④。

しかし、これもまたこの作品で提示されているのが「すれ違いによる劇」にとどまるのか、この作品が何を訴え、何を中心にしている作品なのか教材論としてはわかりにくいといえる。

以下、このことを自分なりに整理しながら、まず、教材論を提示する。

3 私の読み

土神と狐はあらためていうまでもなく、土神と狐が樺の木に恋するという三角関係の物語である。しかし、この小説の問題点は、狐が西洋文明を背負っており、しかもその西洋文明が上辺だけのもの、虚偽的なものであることが問題なのである。樺の木ばかりではなく、土神もそのことを信じてしまい、狐の虚偽を本物の狐と考えて観念の中で狐像を作ってしまう。

では、狐は何故、虚偽の自分を形成しようとしたのか。いうまで

もなく、そこにあるのは自分を「立派」に見せて樺の木の心を得ようとする恋故であった。それは悲しい恋であり、一つついた嘘が次の嘘を呼んでしまい、嘘の上に嘘を重ね、あたかも自分を西洋文明の権化のように見せる結果を生んでしまう。

土神は、狐の西洋文明の権化という虚像、「（私のなかの他者）」^⑤を信じたまま、自己の神としてのアイデンティティーの崩壊に苦しむ。思えば土神に恋をしたのも、本来、製鉄神であったはずの土神が、金属精錬が近代以降国家事業となっていく中で、忘れられた存在、孤独な存在となり、己の孤独を癒やす方法として同じく近代の中で忘れられた存在である木の精霊たる樺の木に恋をしたとも考えられるのである。

しかし、土神はなんとか嫉妬する自己を克服しようとする。「あの不思議に意地の悪い性質もどこかへ行ってしまうって樺の木なども話したいなら話すがいい、両方ともうれしくて話すのなら本当にいいことなんだ」と考えるのである。この時の土神は語り手によって「眼も黒く立派でした」と描写される。土神が冒頭で「眼も赤く」と描写されることを考え合わせると、この時の土神は、決して表面的な負け惜しみや、「神」としての自己を守るための苦肉の策として意図的に「立派」になろうとしているのではなく、心から「神」たる存在に適うものとして顕現しているのである。

しかし、そのような土神は二つのきっかけによって、もとの怒れる神へと変貌してしまう。一つは「狐の赤革の靴のキラツと草に光るのにびっくりし」たこと。もう一つは「狐がいかにも意地を張ったように肩をいからせてぐんぐん向こうへ歩いていく」のを見たことである。赤革の靴はもちろん狐の虚偽の西洋文明の代表といえるものであるが、歩いて行く狐の様子も「意地を張って」ではなく「意地を張ったように」であるのだから、内心の恐怖を押し隠して土神と対峙しようとする虚偽的なものであるといえるだろう。土神は、結局狐の虚偽の故に元の荒ぶる神にもどってしまったのである。

土神は狐を殺害する。直前の狐は「もうおしまいだ、もうおしまいだ、望遠鏡、望遠鏡、望遠鏡」と「一心に頭の隅のところで考える。ここには死ぬことを「おしまい」と考えるのではなく、自分の虚偽がばれてしまうことを「おしまい」と考えている狐の心情が読み取れる。

土神は狐を殺した後、「いきなり狐の穴の中にとび込んでいく。土神にとっても問題は狐自身の存在ではなく、狐が身にまとっている西洋文明であり、それこそが己の存在を危うくするものだったのである。しかし、「中はがらんとして暗くただ赤土が綺麗に堅められているばかり」だった。「レーンコートのかくしの中に手を入れても」「かもがやの穂が二本入って」いるだけだった。それを

知った土神は「途方もない声で泣き出」すのである。土神は自分が観念の中で狐の像を作っており、その観念の狐像を相手にして自分一人で苦しみ、神にあるまじき狐殺しをしてしまったことを知るのである。

一方狐の死に顔は、語り手によって一旦「少し笑ったように」と描写される。この段階では狐が虚偽から解放されることを喜んでいるとも取れる。しかし、二度目に描写されるときは「うすら笑ったようになって」と描写される。

この「うすら笑ったようになって」については諸説がある。「笑ったような死相描写が賢治独特のリアルな表現」という萩原昌好氏⁶。「臨終止念の表れ」とする杉浦静氏。「成仏の資格というような悠長なものではない」とする畑山博氏。「狐のうすら笑いは土神の心理が読み取った自身に向ける嘲笑」とする原田ゆりか氏。「(死)は一時的解放であっても輪廻を断ち切ることはできないのである。(中略)狐のうすら笑いはひよつとしたら、そういう運命の皮肉に対する諦めに近い笑いであるかもしれない」とする伊藤典子氏¹⁰。幸田国広氏は指導書の中で次のようにされる。

殺された狐の『笑い』は、殺されることでようやく嘘をつき続けることから解放された安堵とも考えられるが、同時に土神の『泪』との対照からは、殺すまでもない自分を殺した嘲笑のよ

うにも読める。^⑩

私がここで取りたいのは、幸田氏のいう狐が主体的に土神を嘲笑したというのではなく、原田氏のような「土神の心理が読み取った自身に向ける嘲笑」という考えである。「うすら笑ったように」と感じたのは誰なのか。もちろん語り手であるが、そこに存在するのは土神である。「薄ら笑い」は『大辞林』によれば「相手を軽蔑したように、ほんの少し顔に浮かべた笑い」とされる。「うすら笑い」を見る視点を土神としたとき、「土神は狐に『軽蔑された』と感じた」と考えられるであろう。いうまでもなく観念化された狐像を信じていた自分が軽蔑されるべき存在であると感じたということである。土神はわかり合おうとしなかったことを運命の冷罵の中で生きていくほかない、というわけである。

もちろん、空の巢穴に飛び込むことによって、自身の愚かさを知った土神を語り手がこれ以上嘲笑する必要はないという意見もある。しかし、生徒という読者、特に中学一年生という読者にとってわかりやすいのは、まず視点論であり、その場にいる人物としての土神の気持ちである。そのことを考えたとき、教材としては、土神の気持ちとして、運命に冷罵されている自身というものがあつて注目するべきである。そこにはいつまでも続く修羅道が示されているのである。

末尾、土神は狐と理解し合ったのではなく、己の無知を知り、互いが知らなかった世界（狐にとっては自身の虚偽性の報いという）の底知れぬ深淵を覗くのである。この作品は土神と狐という人間関係を配することで、人間存在がいかに己の観念の世界でしか生き得ぬかを印象づけるように仕掛けてられているのである。同時に、後述するが、その向こう側の世界へ読者を誘う作品であるともいえる。

4 製鉄神としての土神

さて、実際の授業はどのように行われたか。授業は前期中間試験後からの八時間を使つて行つた。まず、一時間目を使つて初読感想文を書かせた。このとき、何でもいから書けというのは多くの生徒が面食らう。むしろ、ここである発問を發して、生徒と作品をよりシャープに出会わせてやつた方がよい。まず、じっくり本文を目読させた後、次の三つの問いについて答える形で考えを書かせた。

問1 土神はどのような人物か。書いてあること、また、書いていないことも推定して答えよ。

問2 土神は、何故、樺の木に恋をしたのか。書いてあること、また書いていないことも推定して答えよ。

問3 狐の死のとき、「うすら笑ったようになって死んでいた」

と描写されるのはどうしてか。書いてあること、また書いていないことも推定して答えよ。

彼等はほとんどの生徒が入試問題（本校二〇一二年入試にて全文出題）の過去問でこの作品に出会っている。しかし、そのときの出会い方は、かなり塾や入試というバイアスがかかったものであることは否めない。むしろ作品の本質に戻ってやってやるためにも、設問の形で本文の流れに注目させるべきであろう。それゆえ「書いていないことも推定して答えよ」という設問形式にしてある。

二時間目で、第一段落に書かれている、土神、狐、樺の木の三者の描写について説明した^①。三時間目に第二段落を授業し、三者の関係、いわゆる三角関係について説明した。

四時間目に問1についての生徒の意見をまとめたプリントを作って、配布し、その上で土神の性格についての説明を行った。ここでは次のような意見が生徒の方から出されていた。

- ① 下品で乱暴で短気で意地っ張りであるため、自分が好意を抱いている樺の木と仲良くしていたり、物知りを自慢したりする狐に嫉妬している。また、狐みたいに物知りでなく、狐に負けるといことが、土神という自分の立場からして、自分のプライドがそれを許すことができない人物。さらに恐らく昔の土神は乱暴ではなかったことが本文中から読み取れ

宮沢賢治「土神と狐」の授業を作る

る。本文中の「赤い鉄の洪」から土神は鉄の神であり、土神の祠の周辺は鉄があり、供物も捧げられていたがもう鉄も取れなくなり供物も捧げられなくなったことで、土神は乱暴になつてしまったのだろう。

- ② 荒々しく乱暴でいつもいばっているようだが、実は、さびしがりやで、繊細な心の持ち主であるとはくは思う。いつでも樺の木のことを考え、樺の木と狐が仲良くしているのを見ると泣いて泣き疲れるほど傷つきやすい心を持っている。僕は、土神を単に強いものではなく、実は弱い一面を持っている人物だと思う。

①の生徒は土神を製鉄神と看取した。だけではなく、それが忘れられることによって、土神は乱暴にならざるを得なかったのではないかと考えている。また②の生徒は土神は弱い一面を持っているとする。こうした点について、生徒の反応はどうだったのだろうか。

（以下TⅡ教員・SⅡ生徒）

T 「土神が製鉄神っていうのわかるかな？ 『もののけ姫』って見たことある？」

SⅠ 「あるある」

T 「あそこで出てきた『えぼし御前』っていうのが、率いていたのが製鉄集団。ああいう人たちが祭っていたのが土神やった

と考えられるわけや。化学の先生に聞いたんやけど、『溶けた銅の汁』にしても『赤い鉄の洪』にしても銅とか鉄の精錬の過程で出る酸化銅、酸化鉄の可能性が高い。要はさびやな」

S 2 「それは分かったけど、①の意見の『恐らく昔の土神は乱暴ではなかった』っていうのがようわからん。」

T 「そういう製鉄っていうのは、昔はある特定の職業集団に代々受け継がれてきたことやった訳や。そういう特定の製鉄集団に任されていた仕事が…。これはいつの時代？ あとの騎兵の練習から考えると？」

S 4 「明治？ 大正？」

T 「そのあたり、おおざっぱにいつて近代といえる。近代になると、製鉄そのものが国家事業になっちゃう。富国強兵の名の下に国家の仕事になるわけや。作られるものも大砲とか鉄砲になっていく」

S 5 「先生、それがなんで②の意見にある『弱い』と重なってくるの？」

T 「土神がものすごく神としてのプライドが高いっていうのはわかるよな」

S 6 「わかる」

T 「ところが土神はそのプライドに見合うだけの実体がないわ

けやな。近代になって最早、人間にも忘れられかけてるし、神として自分でもどうかと思う恋をしている。しかもその恋を止められへんのやな」

S 7 「他の中学落ちたけどプライドだけ高いみたいな奴かな」

T 「そこまでいえるかわからへんけど、それに近いもんはあるかもな」

授業の中で、他の中学を受けたプライドという言葉があっさり生徒から出てきた。生徒が自分達を少なくとも戯画化して「土神と狐」の世界に同化しようとしている様が見てとれた。

5 土神の恋と嫉妬

五時間目に第四段落を授業し、問二についてまとめたプリントを配布した。

③ 土神が祭りも近くの人間は一つも供物を持つてこなかったり、自分の外見のせいや、一人だけにいるというおもしろくない生活を送っている中で、樺の木だけは、こんなに誰からも好かれない自分と会話してくれる、心の傷を癒やす唯一の人物だったから。

④ 土神は鉄の神であり、村人も土神に感謝し供物を捧げていたのだが、鉄がとれなくなってしまう、村人も供物を捧げなくな

つたことで、土神は人間に怒りをぶつけていたが、たった一人だけ自分の話し相手になってくれる樺の木にだんだん親近感がわいてきたのだろう。

T 「前回も言ったけど土神ってものすごく『神』ってこうあるべき、みたいなんをもっている人やね。それに自分が則れないとすごく自分で落ち込んだじゃう？」

S1 「それって恋したらあかん相手に恋をしたっていうこと？」

T 「それだけじゃないな。他にもあると思うけど、わからへん？」

S2 「自分が嫉妬してるっていうこと」

T 「それ以前に、なんかない？」

S3 「これかな『狐の言っているのを聞くと全く狐の方が自分よりはえらいのでした』」

T 「そこね。ただし、その狐の言っているのって具体的にどういうこと？」

S4 「書斎のあちこちに顕微鏡やらロンドントाइムスやら大理石のシイザアが転がっていること」

T 「狐はそれをどんな調子で言っている？」

S5 「『謙遜のような自慢のような』」

T 「それって実はどっちなの？」

宮沢賢治「土神と狐」の授業を作る

S6 「自慢」

T 「そういうこと、言葉の字面だけから見たら謙遜なんやけど、明らかに自慢なわけや。そういう自慢って、実は……？」

S7 「狐の嘘」

T 「そこやな。冒頭にも出てきたように狐は『不正直』。もちろんそれは樺の木の心を得るためやったのやろうけどな」

S8 「嘘の狐の言葉に踊らされて土神は落ち込んだじゃう」

T 「そう。もつという土神は自分で『狐』像みたいなもんで自分でつくっちゃうんやな。そこにある『狐』像って、狐の嘘に基づいてるんやからもちろん虚像に過ぎひんわけや。けど土神は自分の中でその虚像の土神に負けたと思ってしまっやな」

6 狐の殺害と土神の涙

六時間目に第五段落の前半で改心した土神について授業した。七時間目に問三のプリントを配り、改めて土神の狐殺害と土神の涙の意味、狐の「うすら笑ったようになっ」と描写される意味について考えさせた。

⑤ 狐は自分の持っているコレクションのすごさなどを利用して樺の木の恋心をつかんでいて、それについて土神はイライ

ラしていて、また今日の狐のえらそうな態度でそのイライラがピークに達し狐を殺害してしまったが、いざ狐の住む穴の中へと入ってみれば、狐が樺の木に自慢気にしゃべっていたコレクションなどはなく、自分が殺すほどイライラしていることが馬鹿らしく、狐にも軽蔑されるだろうと思うほど自分がばかばかしかったから。

⑥ 土神は樺の木に狐が言っている話を聞くと全く狐の方が自分よりもえらく、狐を殺してしまっただけから自分も自分が狐より劣っているように思えて自分は神であるのに狐の屍骸を見ればかにされているようにみえたから。

土神は虚像に基づいて、狐を殺してしまう。そのことは狐にとっても虚飾がはがれることこそ問題であった。

T 「土神がここで元の荒ぶる神に戻ってしまうんやけど、その理由を二箇所抜き出して」

S 1 「『ふと狐の赤革の靴のキラッと草に光るのにびっくりして』と『狐がいかにも意地をはったように肩をいからせてぐんぐん向こうへ歩いているのです』」

T 「そこね。その後半のそこなんやけど、『意地をはったように』になっているよね。『意地をはって』とどう違う？」

S 2 「『意地をはって』やったら、ほんまに怒ってる感じ。『意地

をはったように』やったら、ほんまは恐いんやけどそれを押し隠しながらって感じ」

T 「そこね。狐はここでも虚飾を捨てきれへんのやな。そしてそれが土神の怒りを招く」

S 3 「狐は狐なりのプライドがあった。」

T 「そうともいえる。殺される直前に、狐はどう思っている？」

S 4 「『もうおしまいだ、もうおしまいだ、望遠鏡、望遠鏡、望遠鏡』」

T 「そこで狐が恐れているのは死？ それとも…」

S 5 「嘘がばれることを死より恐れている」

T 「そう。そうして狐は殺される、巢の中には何も無い、書齋も顕微鏡も大理石のシイザアもない。かくしにもかまがやの穂が二本あっただけやな。この二本のかがやについては魔法のネタと書いてくれたいた人もいたし、一本を土神にあげて仲直りするつもりだった、と書いてくれたいた人もいた。でも魔法のネタやったら、なんで、望遠鏡とか出せへんかったんやろと思っし、もし誰かに一本あげるつもりやったら、それは誰やと考えられる？」

S 6 「樺の木」

S 7 「狐の真心？」

T 「そうともとれる。狐という虚飾に満ちた人生を送った人物

の唯一の真心やったともね。ともあれ、土神は虚像の狐を恐れ
て狐殺しをやってしまったわけや。けれども『そんなことは夢
にもおれの考えるべきことじゃない』んやな。結局土神は神と
してのプライドにこだわるあまりその自分を見失ってしまう。

それゆえ雨のように涙を流す。一方、自分の馬鹿さかげんがわ
かるから狐が『うすら笑ったように』見える訳や」

S8 「悲しい話なんやな。最初入試問題で読んだときは土神って
変な奴って思ってたけど、だんだんわかってきたわ。ほくらと
同じなんかな」

7 読者の自己形成へ

さて、生徒の最終感想はどうだったのであろうか。

⑦ この「土神と狐」を自分は面白い作品だと思った。その訳
は、恋やそのときに起る嫉妬などがまるで本当のこのよ
うに生々しく表現されているからである。この作品には土神
狐と共に樺の木がでてくる。土神・狐共に樺の木が好きなの
だが、樺の木は、表面上、冷静、知的な狐を好いている。

しかし、狐は樺の木に好いてほしいがために多くの嘘をつ
いていた。文章中から狐は狐は死よりも嘘がばれること、つ

宮沢賢治「土神と狐」の授業を作る

まりそこまで樺の木のことを好きだったと感じられる。だが、
嘘をつくことは手段としては正しくなかったのではないだろ
うか。また、狐は、樺の木を奪おうとしていた土神を嫌って
おり、樺の木と土神が一緒にいるときには嫉妬もしていた。

次に土神である。土神はその名の通り、「神」であり、
「神」としての理想の姿になりたいと願っている。その反面、
汚く、荒々しく、短気で暴力的である。また、樺の木を独占
したい、それに余計な狐を消したい消したいという欲や、樺
の木と仲のよい狐に嫉妬を持っている。その気持ちが大きく
なり、狐を殺してしまう。神としてあるまじき行為をしてし
まうことへの恐怖や、神としての理想とのギャップに苦しむ
様が見られる。この点から神としてのプライドは持っており、
また一時期、嫉妬・欲が消えて、神にふさわしい人物になっ
ており、神としての素質は持っているようである。ここから
根は狐と同様よい人物であるが、樺の木が好きあまり、時
に感情的になって嫉妬で狐を殺してしまう。でも、彼を本当
に悪い人物だとはいえないのではないだろうか。僕にもブラ
イドが捨てきれずがあり、思いと反対の行動を取ることがあ
る。

最後は樺の木である。はつきりいって狐が殺された原因は

樺の木にあるのではないだろうか。そう考える訳は、樺の木は狐のことが好きだったが、狐の知識、かしこさなどは上辺だけのものであり、それを見抜く目があれば、狐は苦しまずに済んだのではないか。また、土神を先入観だけで恐れ、よそよそしい態度をとらず、もう少し親身に狐と同じように接すれば土神も神の道を外さずに、逆に神としての理想に近づけさせ、土神の悩みを取り除くこともできたのではないか。

それが樺の木がすべきことだったのではないかと思う。このように恋・嫉妬などが生々しく書かれた「土神と狐」は面白い作品だと思う。

⑦の生徒はこの作品にプライドという自身と共通する問題意識を見ている。これらの生徒は、そこに自分のかつて理想としていた世界と現在の自分との不一致を見ているともいえるだろう。と同時に、この作品は読者を新しい世界へ誘う回路でもあるかもしれない。この作品は、現在の自分が現実が見えていないということを示すだけでなく、現実を踏まえたあるべき自分へと、到達するべき透徹した世界を垣間見せてもくれるからだ。生徒のそのような世界が、互いに「親身に接す」ことで、「理想」へ近づく世界を目指そうとしていることがわかる。

そこにこそこの作品の教材価値はある。生徒が教室という場で語

り合いながら、作品に同一化しつつ、さらにその向こうにあるお互いの理想を目指していくことを確認し合うこと。そのことにこそこの作品を教室で読み合う意味はあるのではないだろうか。生徒は自分の経験や生活と照らし合わせながらもこの作品を読み通してくれたと考える。その経験は次の文学作品を読む経験と重なり合いながら、生徒を揺さぶり続けていくだろう。

注

- ① 小森陽一「土神と狐」(『最新宮沢賢治講義』一九九六年二月、朝日新聞社)、一一五頁。
- ② 註①に同じ。一一八頁。
- ③ 牛山恵「『土神ときつね』を読む」『日本文学』二〇一二年二月。
- ④ 田中実「新しい教材論」へ向けて——文学作品の読み方／読まれ方——『往復書簡』第十二回〈深層批評〉実践のために『月刊国語教育』二〇〇五年二月。
- ⑤ 田中実「『読みのアナキー』Ⅱ『還元不可能な複数性』を超えて」『小説の力——新しい作品論のために』一九九六年二月、大修館書店、一九頁。
- ⑥ 萩原昌好「『土神と狐』論」(『作品論 宮沢賢治』一九八三年六月、双文社出版) 一〇一頁。
- ⑦ 杉浦静「賢治文学における『死』のイメージと〈臨終正念〉」『近代文学論』一九七五年三月。
- ⑧ 畑山博「土神と狐」(『宮沢賢治幻想文学事典』一九八九年一〇月、六興出版) 二七三頁。

⑨ 原田ゆりか「土神と狐」論——『神といふ名』『異色性』をめくつて」『宮沢賢治』一九九二年一月。

⑩ 伊藤典子「宮沢賢治『土神と狐』論」『東京女子大学日本文学』一九九五年九月。

⑪ 幸田国広「土神と狐」（『新編現代文B 言葉の世界へ 教授資料 3 Ⅱ部1〜3単元』二〇一四年三月、教育出版）九三頁。

⑫ ここで樺の木についても説明している。当初、生徒から「樺の木って悪い奴なの？」という質問や、「土神による狐殺しの前に震えているのは、土神を苦しめた自責ではないか？」という質問が出た。そこで、私は「樺の木は『木』として動かないし、動けない主体性を持たされない存在なのだ」と説明している。それは情報の洪水の中で受け身であらねばならない我々の姿の写し身でもある。同時に、例えばツイッターやラインを使いながら、そこに掲載する情報は真偽のほどが知れないネット情報の反復である生徒自身の姿であるともいえよう。後の生徒の感想もそうしたことを感得したものだといえよう。こうした樺の木の主体性の無さを女性性というジェンダーによって考えようという意見がある（第六七回日本文学協会国語教育部会夏期研究会 二〇一五・八・九 於都立産業技術専門学校 坂本まゆみ氏「中学生と読む『土神と狐』」口頭発表）。これは読みとしては認められるが、中学生の男子生徒にとっては自己との同一化の回路を失うのではないか。むしろ、現代人が男女を問わず普遍的に主体性を失っている様を考えさせたいほうが、男子生徒にとって人物像が開かれると考える。

※ 「土神と狐」の本文は授業でも、本論の引用でも教育出版『新編現代文B 言葉の世界へ』によった。また、本稿は第六六回日本文学協会国語教育部会夏期研究会（二〇一四・八・一〇 於 法政大学第二中・

宮沢賢治「土神と狐」の授業を作る

高等学校）での発表を元にしてている。会の場で、また会の後で多くの「
教示を賜った方々に感謝申し上げます。」